

二年と一日

有森 信二

和子が携帯を取ると、潤のいつもの投げやりな声が聞こえてくる。午前零時を回っている。

「俺、サラリーマンには向いてないよ。見通し真っ暗だ。企画書を完璧に仕上げねばならない。ところが、肝心の資料が期限過ぎても手に入らないんだ」

和子には、潤の会社の仕事の流れなどわからないから、「いったいどういうこと」と聞かざるを得ない。

「毎晩十二時、一時、二時だ。土日もない。これじゃ神経も、体も持たない。人間の生活じゃない。とにかく、仕事の量が半端じゃない。明日は出勤しない。もう富士の樹海行きだよ」声音が普通ではない。

「大変だろうとは思うけど、そんなに耐えられないぐらいなの。何がどうなってるの。ちゃんと食事は摂れてるの」

「チーフが次々に変わり、それが揃って企画書を二晩、三晩の徹夜覚悟で仕上げるというんだから、たまらない」

潤は、今の商事会社が都合二社目になる。

公認会計士資格取得のため、潤は大学卒業後も五年間専門学校に通い受験したものの、あと一步届かずに諦めざる

を得ず、和子の勧めもあり、就職に落ち着いた。

「スーツ着て早足で地下道を歩く姿って、俺にはあり得ないよ」と言っていたサラリーマンへの渋々の転身だった。

その最初の外資系のデータ会社は、暇過ぎると言って一年で辞め、国内大手の商事会社に転職した。

商事会社の方は、目まぐるしく変わる情勢を読み、即戦力としての要求に応えねばならないという現実には、「毎日午前様。訳もわからず、心も体もついて行けない。外資系と違い、日本人は働き過ぎだよ」という電話が、福岡の和子のもとに毎晩入ってき始めたのだった。

初めてではない「富士の樹海行きだよ」と言う言葉に、今回は強く引つかかるものを感じ、和子は急ぎ上京した。

和子が見たのは、カップメンやコンビニ弁当の腐臭と徹にまみれた部屋だった。ゴミに埋もれた潤は、目蓋を窪ませ、薄汚れたスーツ姿のまま仰向けに横たわっていた。

駆け寄った和子は、潤を抱え起こした。目を虚ろに開けたり閉じたりする。商事会社には辞表を出したと言う。熱はないものの、トイレに吐瀉物の痕跡があり、スーツの袖にもこびりついている。

すぐに救急車を呼んだ。三日続けて点滴を受ける間、潤はずっと眠り続けた。救急病院の医師は、「脱水症状がかなり進み、平衡感覚がおかしくなりました」と言った。上京するのを躊躇っていたら、と考えると和子はぞ

つとした。十歳の頃までよく自家中毒を発し、決まって入院、点滴をしたものだと思ひ起こした。自家中毒というのは、神経の細い子供が罹りやすく、脱水症状は、即命に關わるものだった。

退院の許可を得てアパートに戻る途中、「福岡に戻らないの」と聞くと、潤は頑強に首を横に振った。同じ高校卒の友人たちと比較されるのが、何より嫌なのだ。

和子が大掃除をし、昼食の準備をしている途中に、外資系の食品会社から、面接日時のメールが入った。商事会社を辞める前に、転職の申し込みをしていたらしい。

二日後の面接の日には顔色も戻り、その日の内に内定を貰ってきた。就職に転じるのなら、と最初から狙っていた会社だったらしい。和子と潤は、ビル群の中でも一際目立つ豪華なビルを見上げ、一階のレストランで乾杯した。

ところが、希望を抱いて出社して二週間と経たないうちに、解雇の通告をされた。「帳簿は電算化されていないのですか」と尋ねた途端、直属上司の逆鱗に触れたらしい。

その夜の、潤の落ち込みようといったらなかつた。「だから、最初から俺はサラリーマンはダメだと言つたじゃないか」と、激しい言葉が和子に浴びせられた。

そういう経歴がありながら、一月後に四社目の機械系大手への入社が決まった。「一から出直した。今度こそは気合を入れるよ」潤も三社目の解雇の顛末がかなり堪えた

らしく、殊勝に声を詰まらせた。「石の上にも三年と言うわよ。神経張つて頑張らなくてもいいから、一日、一日を地道に見詰めてやってみてごらん」ということで、今度は何とかかなりそうだという感触を得、本人も大丈夫だと言うので、半年近く滞在した東京を離れ、帰福したのだった。

「二年の実務経験しかないからと、みんなの前で怒鳴られる。二年になるから何だというんだ。我慢も限度だ」

その潤からの電話攻勢が、また激しくなった。和子は、あの日の汚れたアパートの様を思い、今すぐにも飛んで行きたいという思いに耐えながら、「そう、あれから二年を過ごしてきたのね。たいしたものよ。焦らず急がずに、まず目の前の仕事に向かうことよ。だから、今日はもうお仕舞い。明日は必ずいいことが待っているわ。恐れることも、焦ることも必要ないの。大丈夫だわ。母さんには信じられるのよ」と、潤の苛立った言葉が少しだけ治まつてくるまでの、遅い時間の長い電話に幾度も付き合ひながら、最後には気持ち静め、そう言うことにしていた。

「頑張らなくてもいい、か。そう、一日、一日だった。忘れてた。これ、俺自身の問題だよな。いつの間にか二年が経つたんだ。じゃあ二年と、次は明日の一日なんだよな」潤にしては短かめの電話の言葉の調子が、深夜の闇の向こうで、心なしか和らいで聞こえた。

(了)